語源について　　第５回

前回に続き生活のなかに密着した言葉を中心に、語源について言葉を洗い出す。
“語源のたのしみ”岩渕鋭太郎 著書より抜粋して記載。

　複合した語だけでなく、単独の語でも、漢字で書くために、本来の起こりに気がつかないことがある。「関所」のセキ、水を止めるセキ(堰)も、漢字で書くと関係がないように思われるが、どちらも、水や人などの物事の流れをとめる意の「せく」という動詞の連用形(名詞法)である。あるいは、セキ(咳)も同じ語であろう。
　助詞の「の」と同じ意を表すものとして古代において「な」の存在したことを知れば、「マナコ(眼)」が「目の子」であり、マナジリも「目の尻」であることがわかる。ミナト(港)も「水(ミ)の門(ト)」であることがわかる。ミナモト(源)は「水の元」である。

- はばをきかす：威勢をふるう。「はば」は、横の広さの意から、威勢、はぶりの意に使われた。自動詞は「はばがきく」である。「映画界で大いにはばをきかす」「業界にはばのきく男だ」などのように使う。
- 分別くさい：思慮ぶかそうである。「分別」は物事を取り分け整理して判断することである。わきまえ。「分別がある」「分別がない」と言う。「まだ幼くて分別がない」などと使う。「分別くさい」は、いかにもわきまえがありそうに見えることである。「なかなか分別くさい顔をしている」
- 老舗：代々つづいた商店。しにせのこと。「老舗」と漢字で書いた語形は、「しにせ」とも読む。「舗」は「店」のことであるが、また、「舗」には「敷く」「並べる」の意もある。「舗道」「舗装」の「舗」がそれである。
- だしに使う：自分の利益のために利用する。または、方便に使う。口実に使う。「民主主義をだしに使う」「だしに使われただけの話さ」などと言う。
  元来、「だし」は「かつおぶしのだし」「だしこぶ」などの「だし」で、こぶ、かつおぶしなどを煮出して作った汁のことである。正確には「だしじる」と言う。
  なお、「だしにする」とも言う。「子供をだしにして遊びまわる」「お客をだしにして酒を飲む」などと使う。
- 起草：文案を作ること。下書きを書くこと。「草」は「草稿」「草案」のことで文章の下書きの意である。「起草する」と動詞としても使う。「憲法の起草」「決議文の起草委員」「法案を起草する」などと言う。
- たむろする：集まっている。人がむらがっていること。「あちこちに分かれてたむろしている」などと使う。「たむろ」は、人が集まること、あるいは集まっ

た所を言い、しばしば「屯」という漢字があてられる。

- 去就：出処進退。「去」は去り行くことで、「就」はそこにとどまることである。「去就に迷う」「去就を決する」「彼の去就が明らかでない」などと使う。
- 青写真：具体的な計画案。もともと、建築の図面などを複写する時の青写真のことであるが、近年、「首都計画の青写真」「青写真は出来ているんだが、なかなか実行の運びには至らない」などと比喩的に使うことが多い。
- 看板倒れ：外見だけのこと。外観だけが立派で実質がともなわないこと。「公明選挙も看板倒れの観がある」などと使う。「看板」は、もと、劇場や商店が、通行人の目につくようにした板のことだが、それには、人の気を引く広告を書いたりした。実物がその広告の通りでないものが「看板倒れ」である。
- 疑心暗鬼：疑ってありもせぬ事を考えること。もと、「列子」の「疑心、暗鬼を生ず」から出た言葉である。おそれ疑う心がある時は、ありもせぬ種々の幻想を生じて、恐ろしい鬼の形を見るものだと言う意。「暗鬼」は、くらがりの鬼のことで、姿が見えない恐ろしい者のこと。「お互いに疑心暗鬼の状態だからまとまりようがない」
- 色めく：緊張した様子が現われる。活気づくこと。「当選の報に一座色めく」などと使う。また「色めきたつ」という形で使われることも多い。「一斉に色めきたった」。「色めく」は、元来は「色づく」または「華やかになる」の意である。「めく」は「春めく」「皮肉めく」などの「めく」と同じで「そのものらしくある」「そのきざしが見える」というような意の接尾語である。
- .たかをくくる：軽視する。大したことはないと軽く見ること。見くびること。「大事件にはなるまいとたかをくくる」「彼にそんな実力はないとたかをくくっていた」などと使う。「たか」はもと、数量のことで、転じて程度の意にも使う。「たかが知れている」と言う言い方もある。大したことはないという意味である。
- めかす：おしゃれをする。「めかす」は元来接尾語で、「色めかす」「おとなめかす」「時めかす」などと用いる。その「めかす」を独立させて用いたのが、この言い方である。そして、「おしゃれをする」の意味は、恐らく「色めかす」などというものから導かれたものであろう。接尾語を独立させて用いる例は、ほかにも「えらぶる」「おとなぶる」からの「ぶる」などがある。

“語源のたのしみ”岩渕鋭太郎 著書より抜粋して記載。　　（池田）